

一遍上人の念仏思想(三)

——和讃について——

一遍上人の念仏思想を、和讃について考えてみたい。『一遍聖絵』(以下『聖絵』と記す)に明らかな如く、一遍上人作の和讃は「別願讃」のみである。これに比して和歌は多く、偈も多少はある。今、一遍上人の和讃の特質をさぐるのに、これらの和歌や偈と対照して考えてみたい。

まず、和歌について考えてみよう。一遍上人の和歌は約五十首ほどある。これら五十首の和歌がどういうテーマで詠まれているかを大まかに分類すると、(イ)心のあり方を詠んだもの(十七首)、(ロ)名号について詠んだもの(九首)、(ハ)無常について詠んだもの(六首)、(ニ)その他(十八首)ということになる。(イ)については、後でとりたてて論述するから、(ロ)と(ニ)（ただし、(ニ)はその群の代表歌という意味ではない）の和歌について示すと左の通りである。

(ロ)とことには南無阿弥陀仏となふればなもあみだぶにむすまれこそすれ(『聖絵』四)

一遍上人の念仏思想(三)(梅 谷)

梅 谷 繁 樹

(イ)ころをばにしにかけひのながれゆくみづのうへなるあはれ世の中(『聖絵』七)

(ニ)つのくにやなにはものりのことのはあしかりけりとおもひしるべし(『聖絵』三)

さて、(イ)については、これをさらに四種に分類できるように思われる。左に示すと、

(i) 迷いの情を打破すべきことをテーマとしたもの

ころよりころをえんところえてころにまよふころなりけり(『聖絵』四)

くもとなるけぶりなてそあまのはらつきはをのれとかすむものかは(『聖絵』五)

念仏にもおのがころをひくずはみをせめたまのつゆとしらずや(『聖絵』六)

あともなきくもにあらそふころこそなかなか月のさはりとはなれ(『聖絵』六)

わがと思ひひとの心にひかれつつをのれとおふる草木だになし

一遍上人の念仏思想(三)(梅谷)

『聖絵』九)

思ことなくてすぎにしむかしさへしのべばいまのなげきとぞなる

『聖絵』九)

(ii) 心の本質の喝破をテーマとしたもの

みな人のことありがほにおもひなすころはおくもなかりけるもの(『聖絵』四)

花がいろ月がひかりとながむればころはものをおもはざりけり

『聖絵』六)

(iii) 一遍上人自身の心境——悟道の境地——をテーマとしたもの

世をわたりそめて高ねのそらの雲たゆるはもとのころなりけり

『聖絵』一)

身をするするする心をすてつればおもひなき世にすみぞめの袖

『聖絵』五)

おもふことみなつきはてぬうしと見しよをばさながら秋のはつか

ぜ(『聖絵』十一)

(iv) 身心が南無阿弥陀仏において決定することをテーマとしたもの

ともはねよかくてもをどれころごまみだのみのりときくぞうれしき(『聖絵』四)

くもりなきそらはもとよりへだてねばころぞ西にふくる月影

『聖絵』六)

名にかなふころはにしにうつせみのもぬけはてたる声ぞすずし

き(『聖絵』十一)

さて、『聖絵』によつて一遍上人の念仏勧進の遊行を観察すると、いかにして人間臭い心を捨て去つて、名身に帰入するかということで一貫しているようである。一遍上人の和歌に「心」を素材としたものが多いことは、逆に一遍上人が常に心の迷妄と対峙しなくてはならなかつたことを暗示しているようである。この心の迷妄とは一遍上人の心であると共に、一遍上人の近辺の人々(時衆を含む)の心に、一遍上人が絶えず発見し、おののいたものであつたと考えてよからう。そして、そういう迷妄の心が救われるのは南無阿弥陀仏においてであつた。『聖絵』第三の熊野証誠殿の大権(山伏)の神託に「阿弥陀仏の十劫正覚に一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と決定するところ也」とあり、同書第十一の一遍上人の和歌に、

あるじなきみだのみなにぞむまれけるとなへすてたるあとの一声とあるのが、これを証する。

次に、一遍上人の偈について観察してみる。十一不二頌や六十万人頌は有名であるから特記するまでもあるまい。他に左の如きものがあり、一遍上人の偈はすべてで五つある。

六字之中 本無生死 一声之間 即証無生(『聖絵』三)

一称名号中 三尊垂化用 十方衆生前 九品顕来迎(『聖絵』六)

書写即是解脱山 八葉妙法心蓮故 性空即是涅槃聖 六字宝号無

生故（『聖絵』九）

以上、五つすべて名号の功德をテーマとしている。

最後に和讃について考えてみよう。和讃は一聯四句、全十七聯の七五調である。あれほど数多くの和歌がありながら、和讃はただ一つであるというのも注目されるが、その和讃の冒頭の基調が無常をせつせつと訴えるものであることが、さらに注目される。

身を観ずれば水の泡

消えぬる後は人ぞなき

命を思へば月の影

いで入るいきにぞとどまらぬ

右は有名な冒頭の一節であるが、無常の表白は、私見によれば第五聯迄続いている。一遍上人の無常の観念は、とくに第六聯に要約的に示されているのではなからうか。即ち

過去遠々のむかしより

今日今時に至るまで

思と思ふ事はみな

かなはねばこそかなしけれ

と歌うのがそれである。ここに示されている無常とは、実自身命のはかなさや、六道輪廻の意のままにならぬこと、感覚の衰退等を悲しむことである。無常を素材としつつ、和歌の場合は少し性格が違ふようである。前に一首挙例したが、他のものを左に示すと

おもひとけばすぎにしかたもゆくすゑもひとむすびなる夢の世の中（『聖絵』七）

つまばつめとまらぬ年も降る雪にきへのこるべきわが身ならねば

（『聖絵』八）

世にふればやがてきえゆくあはゆきの身にしられたる春の空かな

（『聖絵』九）

きえやすきいのちはみづのあはぢしま山のはながら月ぞさびしき

（『聖絵』十一）

旅衣木の根かやの根いづくにか身の捨てられぬ所あるべき（『聖絵』十二）

以上の五首である。これらの歌では無常は「理」として、いたずらに悲嘆することなく受け入れられている。例外は最初の挙例と右の第四首目くらいで、ここでは「あはれ」、「さびしき」ということばがあり、無常に押し切られる悲しみが歌われているが、他は無常の「理」に背を向けず、これを「理」として受容しており、たんたんとした心境が示されている。

そこで、再度、和讃の無常の歌われ方と和歌のそれを比較すれば、和讃の退嬰的情調が明確になると言えよう。和讃は第六・八聯では聖道浄土門の教えが救済にならぬこと、第九・十一聯で大乗の法報応の三身の仏も亦然りとしている。第十二・十六聯では名号による救済を説くが、和讃の構成上から推して、前述の如き退嬰的情調にみちみちた無常を、称名の行によつて脱するということになるのであろう。しかし、

和讃の第十三聯に言うように、かかる無常感の表白は、はたして「十惡五逆のつみ人」の「生死の罪」——「口にまかせて唱ふれば声に生死の罪消えぬ」とある——にどう意味的につながっているのであらうか。少しくはつきりしない。和讃の構成を無視して第十二聯より第十六聯迄を抽出すると、名号即救済、つまり十惡五逆の凡夫の往生の決定、念仏の数を超越した考え方、万事放下偏依名号の思想等々は、一遍上人の念仏思想の真髓である。しかし、これを和讃の全体の文脈からみると、生から死へと向かう軌道上で述べられているため、無常をソフトにオブラートし、来迎引接に導くものとしての機能しているように思われる。名号が、あわれ、はかなき、悲しみにみちた無常をいやし、これを念々に相続することによつて死への道を安樂にすることを、和讃は流れる如くに歌いかけているとしか解せない。うんと抽象的に言えば、和讃は不遇↓称名往生（救済）を歌つていと言え。和讃の構成から見ると、名号とは生から死への円滑なる媒介なのである。ひるがえつて、一遍上人の興願僧都宛消息法語を想起すると、名号即極樂往生であつて、無常であるが故の、名号の有難さを強調してはいない。むしろ、逆に「生きとしいけるもの」が「念仏」そのもののなのであり、ここに踊躍歓喜の境地がもたらされるのである。これは、和讃の姿勢とは逆である。

右の消息法語には「むかし、空也上人へ、ある人、念仏はいかゞ申すべきやと問ければ、『捨ててこそ』とばかりにて、なにも仰られずと、（中略）是誠に金言なり。」とある。一遍上人は、念仏にあらゆる思いを託すことを捨て、只念仏することを至上とした。無常感など歯牙にかけないことが、上人の真骨頂でなかつたか。『聖絵』の冒頭で一遍上人自身のこととして——母を失い、十才で無常の理を悟つたとする——触れられているのみである。それなのに、何故、和讃では無常感がせつせつと歌われているのであらうか。注目されるのは、和歌の場合、上人自身の心境を吐露したものが多いのに反し、この和讃は「念仏の和讃を作て時衆にあたえたまひけり」（『聖絵』九）とあることである。一遍上人の和讃の無常感を中世に一般的な風潮に帰するのでもなく、一遍上人その人の思想でもないとする、一遍上人の対時衆観にかかわってくるものと考えられはしないだらうか。こうした無常感に親近性を持った人々が時衆であつたため、一遍上人はその意に反した和讃を作つたのではなからうか。実は、これは私の今のところの苦しまぎれの推測であつて、もう少し重い理由があるのかもしれない。あるいは又、私が一遍上人の念仏思想に根本的な誤解を持つているのかもしれない。諸家のご批正を得たく思う。